

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 5 月 28 日	
所属部局・職	理学研究科植物学教室・修士課程学生
氏名	李 忠建

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
日本国、屋久島
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
フィールド科学実習 (Fig/insect group)
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 5 月 21 日 ~ 平成 26 年 5 月 27 日 (7日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
京都大学、半谷氏
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

【日程】

5月21日 屋久島到着
5月22日 吉田にて採取、ステーションで観察・測定
5月23日 一湊にて採取、ステーションで観察・測定
5月24日 永田にて採取、ステーションで観察・測定
5月25日 ヤクスギランド、データ分析
5月26日 成果発表
5月27日 屋久島

本実習で、私は屋久島におけるイチジク-イチジクコバチを対象としたチームに参加した。アカデミックな手法・結果は割愛し、本人の足取りを中心に説明する。

1 日目は昼 12 時頃に屋久島空港に到着した。環境整理の他、ヤクザル・ヤクシカの調査地である西部林道を視察した。シカの影響を非常に強く受けた植生であることは一目瞭然であった。

2 日目、調査が開始された。期間中、調査は車で移動しつつ止まった地点で採取をする方式であった。午前中は町の近辺でオオイタビ *Ficus pumila* とガジュマル *F. microcarpa* の果嚢を採取し、午後は採取した果嚢のデータを記録した。また、来たるゲノム実習用のサンプルとして、葉をシリカゲル保存した。効率化のため、ステーションでサンプルを扱う際は3つの小グループに分かれて行った。

3 日目、やはり午前中にサンプルを採取し午後に解剖を行った。採取したのはアコウ *F. superba* と *F. sarmentosa* (形態的な種認識の不確かさからヒメイタビとイタビズラのどちらの変種であるかについては同定を保留した) であった。この地域は西部林道に比べ植物の種多様性が高い照葉樹林帯で、少ない日数で屋久島の植物相を学ぶ上で貴重な材料となった。特に *Mussaenda* 属が日本に分布することが個人的な驚きであった。また、道中立ち寄りヤクシマカワゴロモを観察する機会が得られたことは植物分類学徒としては特筆すべき事項である。

4 日目、イヌビワ *Ficus erecta* およびアコウ *F. Superba* を採取し、解剖した。果嚢内の微小なパーツを同定する力が上達すると共に、調査を始めた当時の観察結果に誤りがあった可能性も考えられるようになってきていた。イヌビワの花嚢は雌雄があるが、先行研究が示唆する通り雌が採取できなかったことから、私は生態に関する考察を漠然と始めるようになった。

5 日目、サンプル数の少ない *Ficus sarmentosa* の追加分を求めて、ヤクスギランド方面へと向かったが、到着するまでにサンプルを得ることはできなかった。我々は後学のためにヤクスギランド内に入り、針葉樹が混じる植生を学んだ。ヒメヒサカキやヤマグルマの他、開花したチャボシライトソウを見ることができた。翌日の成果発表のスライドを準備するに当たって、我々のイチジク-イチジクコバチ班は進捗が良く、その日の内に就寝することができたが、統計的解析を担当した同志たちは一睡もできなかったと聞いて胸が締め付けられる思いであった。私自身は、唯一の植物学教室所属ということもあり、特に生態的な側面についてディスカッションの内容を作成した。

6 日目、成果発表において、我々のコースは全員が英語で説明する機会を持った。適切な順序で文を組み立てなければロジックが伝わりづらい可能性があったため、前もって文章を用意したが、口頭での説明は満足いくものとは言えず、結果を甘受はしつつも訓練の必要性を感じる機会であった。

7 日目は京都に帰還する日であった。時間の都合上、白谷雲水峡で散策する時間を持った。ギンリョウソウやサナギタケといった地表の生物を見て楽しみつつ、ヤクスギランドもそうであったが、同定できないながらも屋久島におけるコケ植物の圧倒的な多様性の一端を実感することができた。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

前述のとおり、本報告書では実習における本人の個人的な体験に重きを置いて説明しており、実習の成果そのものは阿修羅国際セミナーで報告される予定である。



果嚢を観察する同志たち(筆者手前右)



コンロンカ



ヤクシマカワゴロモ



多様なコケ植物

6. その他 (特記事項など)

本実習は PWS リーディング大学院プログラムの支援のもと実施されました。企画・引率・指導・協力等々様々な形で携わって下さった方々に深く感謝いたします。